

青いスピン

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

秋
2025
第7号

宮島未奈

大前粟生

木下龍也

内藤健

伊藤ハムスター

作品募集・入選作品

「バトンと鼻の穴」

文月レオ



青いスピンの 目次

1	創作「橋本頼蔵のひみつ」	宮島未奈
9	創作「猫の置き物と草太朗の物語」	大前栗生
16	作品募集・入選作品「バトンと鼻の穴」	文月レオ
22	エッセー「短歌の未来にいるあなたへ」	木下龍也
25	科学エッセー「進化の話」	内藤健
28	イラストエッセー「学校あるある」	伊藤ハムスター
29	コラム「しおりライブラリー」	
30	コラム「目で読むSDGs図鑑」	
32	コラム「世界の友だちの一日」	

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそつとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、

その本の世界にもどることができます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、
あなただけの新しい世界を見つけてください。

はしもとよりぞう 橋本頼蔵の

ひみつ

宮島未奈

絵・伊野孝行



橋本頼蔵（一七五〇年～一八〇八年）

江戸時代に行われた清糸川造成工事の代表者。近くの阿月川から水を引くことで一帯に豊かな水をもたらし、農業の発展に大きく貢献した。現在は水岩寺に埋葬され、境内に銅像が建っている。

（「わたしたちの清糸町」32ページより）

「これから総合学習の時間では、私たちの住む清糸町について学習します。班ごとに新聞を作って発表してもらうので、まずはテーマを決めてください。」

担任の島田先生が言うと、四年二組の教室に机を動かす音が響きわたる。私たち四人も机をくっつけて顔を合わせた。

「何か意見のある人！」

班長のさらちゃんが元気よく口火を切る。

「何でもいい。」

いつもやる気がないのが砂川くんで、「ぶつちやけあんまり興味ないよな！」と遠慮なく言うのが大ちゃんだ。

「もー、ちゃんと考えてよね。くみちゃんはどう？」

さらちゃんが私に尋ねる。特に調べたいことはないけれど、何か意見を言ったほうがよさそうだ。手もとの「わたしたちの清糸町」を適当に開いたら、橋本頼蔵の名前が目に入った。

「橋本頼蔵について調べてみるのはどうかな？」

開いたページには水岩寺にある銅像の写真が載っている。黒い台座に胸から上が載ったもので、和服を着てあごひげを生やしているのが特徴だ。

「そうだ、この銅像を見に行こうぜ。」

大ちゃんが言うと、砂川くんが「そういえば！」と珍しく大きな声を出した。

「水岩寺っておばけが出るって聞いたことある。」

私は思わず笑ってしまった。おばけなんているんだろうか。さらちゃんも「おばけねえ。」と信じていないような声を出す。

「おもしれーじゃん！ 放課後みんなで行ってみよう。」

大ちゃんの勢いにつられ、私たちは水岩寺に行くことになった。

軽い気持ちで集まったのはいいけれど、橋本頼蔵の銅像は水岩寺の中でもだいぶ山の上の方にあることが分かった。

「まだ階段がある！」

さらちゃんが息を切らして言う。最初のうちは段を数える余裕があったけれど、今はただひたすら上るだけだ。

「おばけはどこにいるんだよ。」

「昼間はないのかも。」

大ちゃんと砂川くんの会話を聞きながら階段を上る。十五分ぐらい歩いて、ようやく砂利が敷き詰

められたスペースに出た。

「橋本頼蔵だ！」

銅像を見つけた私は思わず声を上げた。感動の再会みたいな気分だった。

「すげえ、いい景色！」

大ちゃんの声に振り返ってみると、清糸町が一望できた。住宅地を横切る形で清糸川が流れている。

「ようこそお越しくださった。」

どこからともなく男の人の声がした。四人以外には誰もいないはずなのに。これはまさか……。

「おばけ!？」

さらちゃんが叫ぶように言う。

「おばけとは失礼な。」

銅像の後ろから和服姿のおじいさんが顔を出した。あごには白いひげが生えている。

「もしかして、橋本頼蔵!？」

大ちゃんがひらめいたように人差し指を立てると、おじいさんは「ピンポーン。」と笑った。

「いやはや、小学生がここまで来るのは久しぶりだ。最近の子どもは全部パソコンで調べてしまうんだらう?」

何だかとても怪しい。私たちは輪になり、「パソコン?」「うちパソコンない。」「ていうか本物?」

「やっぱりおばけじゃん。」とそこそ話を合う。

「おじいさんは何年生まれですか?」

意外にも砂川くんが質問した。

「わしか? 寛延三年の生まれだが。」

大ちゃんが「すげえ!」と目を丸くする。

「今でもパソコンは使われていますが、私たちはスマホやタブレットを使うことが多いです。」

さらちゃんがナップザックからタブレットを取り出し、「かんえん3年」と検索した。

「寛延三年は一七五〇年……橋本頼蔵が生まれた年と同じだ。」

「すごいな、その板で何でも分かるのか?」

橋本頼蔵がさらちゃんのタブレットをのぞきこむ。

「たいていのことは調べられますけど……例えばどんなことを知りたいですか?」

「明日の天気だな。」

さらちゃんは早速天気を調べ、太陽のマークが並ぶ画面を橋本頼蔵に見せた。

「明日は一日晴れるそうです。最高気温は二十八度。」

「ほう、こりや便利だ。雨がひどいときは作業を休みにしていたのだが、前もって分からないからた

いへんだった。」

橋本頼蔵は腕組みしてうなずいた。

「作業って、全部手作業だったんですか?」

さらちゃんが質問する。

「そうだ。たくさんの人が集まり、道具を使って土を掘っておった。君たちぐらいの子どもも、とき

どき土を運ぶのを手伝ったものだ。」

大ちゃんが「今の時代に生まれてよかった！」と声を上げる。

「その代表をしていたなんて、すごいですね。」

私は思ったことをすなおに伝えた。きつとみんなから頼られる、立派な人だったのだろう。

「ああ、そのことだが……。わしが代表ということになっているが、そんなにたいそうなものではないのだ。」

四人の「えっ？」の声が重なる。

「わしはただの大工だったんだ。近所の農民たちが『水がなくて困っている。』と嘆くのを聞き、『それなら阿月川から水を引いたらどうだろうか。』と冗談で言ったら、周りがその気になってしまった……。」

橋本頼蔵は照れくさそうに頭をかいた。

「結局わしがまとめ役となって藩に申し入れ、作業を進めて水を引くことに成功した。その働きが認められて名字を授けられたのだが、うまくいったのは集まってくれた人々のおかげだ。だからわしだけ銅像が建つなんて申し訳ないのだよ。」

銅像になった人の気持ちなんて、なかなか聞けないから新鮮だ。

「でもきつと、みんな頼蔵さんに感謝してると思います！」

大ちゃんが言うと、橋本頼蔵は目を細めた。

「それはよかった。時代はずいぶん変わってしまったが、わしは毎日ここから清糸川の流れをながめ

ておるよ。」

新聞にはタブレットや本で調べた清糸川の成り立ちに加えて、橋本頼蔵のインタビュー記事が載せた。発表ではインタビューを実演することになり、さらちゃんと私がインタビュー役、大ちゃんと砂川くんが橋本頼蔵役をやった。

「どうして清糸川を造ろうと思ったんですか？」

「もともとは冗談で言ったのだが、周りがその気になってしまって……。」

「それが成功したんですからすごいですよ！」

実際のやりとりに加えて、私たちの感想も入れている。発表が終わると、クラスのみんなから拍手が送られた。

「橋本頼蔵にインタビューするという発想がとてもよかったです。江戸時代の人が身近に感じられますね。」

島田先生はほめてくれたけれど、まさか私たちが本人に会ったなんて思っていないだろう。橋本頼蔵に会ったのは四人だけのひみつだ。

その日の放課後、私たちは再び水岩寺を訪れた。一度目の訪問では途中でへとへとになっていたけれど、二度目はゴールが分かっているからがんばれた。

橋本頼蔵の銅像は、最初に見たときより親しみやすいおじいさんに見える。

「頼蔵さん！」

大ちゃんが大きな声で呼びかけてみたけれど、返事はない。

「今日はいないみたいだね。」

砂川くんが言う。だけど私は何となく、二度と会えない気がした。

「発表、うまくいきました。ありがとうございます。」

さらちゃんが銅像に向かって言う。私もそれに合わせて「ありがとうございます。」と頭を下げた。

「あれ、この銅像、ちょっと笑った？」

「えー、気のせいだよ。」

大ちゃんと砂川くんのやりとりで笑いながら後ろを振り返る。橋本頼蔵が造った清系川は、今日もおだやかに流れている。

宮島未奈 作家。著書に「成瀬は天下を取りに行く」「成瀬は信じた道をいく」「それいけー平安部」などがある。

猫^{ねこ}の置き物と

草太^{そう}朗^{たろう}の物語



おお まえ あ お
大前栗生

絵・kigimura

おじさんは仕事で世界中を飛び回っていて、帰国するたびに草太朗にいろいろなお土産を買ってきてくれる。

例えばそれは、こんなものだ。トーマスボール。モアイ像のレプリカ。はにわのマスコット。トルコランプ。ノルディックセーター。オーストラリアの先住民族のブルーメラン。ドリームキャッチャーという蜘蛛の巣に見立てられた飾り物。その他あれこれ。

お母さんとお父さんはおじさんのお土産の多さに正直困っているけど、それは不登校の草太朗をおじさんなりに元気づけるためだと二人とも分かっているから、家の中に奇妙なものばかり増えていくのをしぶしぶ容認している。

今日はおじさんが久しぶりに日本に帰ってくる日で、空港から自宅までの間にある草太朗の家に寄ってくれる。どんなお土産をくれるのか、草太朗は朝からそわそわしていた。

夜の八時過ぎに家のチャイムが鳴って、おじさんがやってきた。

陶器でできた、猫の置き物だ。

くりくりした目で正面を向いて、お座りをしている。

初め草太朗はその置き物を招き猫だと思ったけど、よく見ると猫の手は何かを招いているような感じではなかったから、招き猫によく似たものなのだと分かった。

おじさんの説明によるとこの猫は、草太朗の行ったことのないどこかの国で、子どもの魔よけとして根付いている民芸品らしい。

どうして「どこかの国」なんて言い方をするかという、草太朗はその凜としたたずまいの、りんごみたいに赤くて丸い特徴的な目をし、それでいて焼きたてのパンのようにふつくと柔らかそうな耳をした猫のことがすっかり気に入って、おじさんの話をろくに聞いていなかったからだ。

「これ、おじさんがくれたお土産の中でいちばん好きかも。」

草太朗がそう言うと、おじさんは「そうか。そいつはよかった。」とやたらとうれしそうな顔をして、草太朗

不精ひげを生やしたおじさんは疲れた顔をしながらも、世界を旅してきたということの誇りを胸にたたえているかのように目を輝かせていた。お母さんとお父さんへあいさつを済ますと、おじさんは草太朗に「調子はどうか。」と聞いた。

おじさんはほかの人と違って、何だかとても「自然体」な気がする。長いこと学校に行けていない草太朗に、あまり気を遣わないでいてくれるというか。

「まずまずだよ。」

草太朗はちよつと背伸びして答えた。

「そいつは何より。」

おじさんは低くてずっしりとしたバリトンボイスで言った。

「草太朗にお土産があるんだ。」

おじさんはいつものように言って、巨大なスーツケースの中から小さな木の箱を取り出し、その中でさらに厳重に施された包みを開け、草太朗の手のひらよりちよつと小さいくらいの置き物を取り出した。

の頭をぐしゃぐしゃとなでた。

その夜、草太朗は猫の置き物を枕もとに置いて眠った。いつも夜は、明日も学校があること、でも自分は今行けないのだと考え、そわそわと不安になってうまく眠れないのだけれど、その日はどうしてかよく眠れた。

学校に行けなくなった理由は、草太朗本人にもよく分からない。ただ、学校みたいにな人が大勢いて、いろんな人が話しているところに行くと、自分のうわさ話がされているんじゃないかと考えてしまう。自分が責められているんじゃないか、何か悪いことをしちゃったんじゃないかと。そういうふうを考えすぎてしまうところがあって、今から半年前の小学四年の始業式の朝、草太朗は突然ベッドから出られなくなった。勝手に涙が出てきて、外に出るのが、学校に行くのがつらくなってしまった。それ以来草太朗はほとんど毎日、家の中で過ごしている。

草太朗の部屋の中は、おじさんが買ってきたお土産でいっぱい。草太朗は朝起きると、本棚の上の、いちば

ん見映えのいい位置に猫の置き物を置いた。不思議な引力を感じて、目が離せない。お母さんとお父さんが仕事に行って、家に一人残されても、草太朗はご飯も食べず、本棚の前に座って、じっと猫の置き物を見つめていた。家の中からは、チツ、チツ、と目覚まし時計の秒針が動く音以外、何の音もしない。マンションの外から、何も聞こえてこない。

と、突然声が出て、草太朗は震え上がった。

「腹が減ったよ。」

誰かがそう言っていた。もちろんそれは、草太朗じゃない。

声は、猫の置き物からしたみたいに聞こえた。

まさか。そんな。

草太朗が猫の置き物にぐうっと顔を近づけると、

「そんなにじろじろ見ないでよ。恥ずかしいなあ。」と声がした。

「ね、猫の置き物がしゃべった！」

草太朗は思わず叫んだ。そんなに大きな声を出すのは、

ずいぶんと久しぶりのことだった。

「そりゃあしゃべるよ。生きてるんだからね。」と猫の置き物は言った。「それよりさあ、腹が減ったんだけど。」「ええっと、君は、何を食べるの？ キャットフードとか？」

猫の置き物と会話しているなんて、これは夢にちがいない、と思いながら草太朗は言った。

「キャットフード？ そんなのこのボクには似つかわしくないね。ボクが欲しいのはね、物語なんだ。」

「物語？」

「そ。ボクは、物語を栄養にすることで君たち子どもをよこしまなものから守ってるんだ。」

「ヨコシマなもの……。魔よけてこと？」

「そ。」

どうやら、口を少しだけとがらせて、「そ。」と言うのがこの猫の口癖みたいだ。

「早く物語をちょうだいよ。昨日、君はすぐに寝ちゃうし、ボクは飛行機の長旅でおなががぺこぺこなんだから。」

べったのって夢じゃなかったんだ、とがく然とした。

次の日も、猫の置き物は物語を求めてきた。

いったいどうしてしゃべるのか、草太朗は気になって聞いたけれど、

「じゃあ聞くけど、君はどうしてしゃべるのさ。君はどうしてご飯を食べるのさ。」

と逆に質問をされてしまった。

その答えは、草太朗にも分からなかった。何だか、うまくはぐらかされてしまった。

この日、草太朗は、太宰治という人の書いた、「走れメロス」という小説を読み聞かせてあげた。

「ふーむふむ。『メロスは激怒した。』という印象的な一文から始まる、人を信じる心の尊さだったり、友情の大切さが詰まった名作だ。これは中学生で習う話だけど、君はよく知ってるね。ただこれもボクは食べたことがある。おいしいけれど、もっと変わった味をボクは味わいたいんだよね。そうだ。ねえ、草太朗くん、明日からは、君の物語を聞かせてよ。」

そう言うと、猫の置き物は目を閉じて、それきりしゃべらなくなった。

変な夢だな、と草太朗は思った。けれど、いつまでたっても、草太朗自身の目が覚めない。そのうちにお母さんもお父さんも仕事から帰ってきて、草太朗は夕ご飯を食べて、お風呂に入って、ベッドの中で布団をかぶった。うとうとしかけてようやく草太朗は、猫の置き物がしゃ

「僕の物語？」

「そ。」

「それって、何なのさ。」

「さあ。そんなのは、君の見つけることだよ。君だから見つけられるものなんじゃないかな。」

そう言う猫の置き物は大きなあくびをし、また眠ってしまった。

草太郎は考えた。物語なんて言われたって、僕の生活には、何もたいしたことが起きたりしない。僕自身も、全然、たいしたやつじゃない。

困った草太郎は、その日の夕食のときに、お母さんとお父さんに、

「物語って何だと思う？」

と聞いてみた。猫の置き物がしゃべって、物語を聞きたがっているなんてことは、とてもじゃないが話せなかったけど。

答えはそれぞれ違っていた。

「どきどきさせてくれるものかなあ。」

とお父さんは言った。

「私は、自分自身に似た人をその話の中に見つけられるものだと思うな。」

お母さんは、少し難しいようなことを言った。

「ふーん。じゃあ、『僕の物語』って何だと思う？」

「草太郎の物語？」

お父さんは、うーん、と考え込んだ。同じように考え込んだお母さんが、夕食を食べ終わるときにこう言った。「草太郎が何かの一步を踏み出すことだったり、一步を踏み出そうと思えるもの。それって、何でもいいと思うんだ。趣味でも、勉強でも、ほかの何でも。ただ、それをする事で草太郎が後悔しないこと。」

草太郎は、考え込みながらお風呂に入り、そして眠りについた。

朝起きて、まだ自分の物語とは何か考えていたけど、分からなかった。見つけに行かないといけないような気がした。

そして、ふとこう思った。

学校、行ってみようかな。

うん。お母さんとお父さんは、「無理しなくていいよ。」と言ってくれるだろうけれど、学校に行ってみよう。まずは、校門の近くまで。久しぶりに学校に行くのは、怖い。どきどきと心がゆれ動く、たいへんなことだ。もしかしたら、教室に向かわず、家に引き返してきてしまうかもしれない。教室に入ってみみんなに元気よくあいさつ

をすることよりも、そのほうがうまく想像できた。それでも、僕にとっては大きな一歩だと思う。

そう、大きな一歩。

大きな一歩なのだから、それは、僕の物語なのかもしれない。

帰ったら、猫の置き物に聞かせてあげよう。

第3回
作品募集
入選作品
結果発表は
WEBにて

文月レオ
絵・Yuki Uebo

バトンと瞳の光



何だかこれ、ゆりちゃんに似ている。

色白に黒目がちの瞳のゆりちゃんに。ぼくは店に並ぶ

レーズンパンを手にとると買物かごへ放りこんだ。

運動会の練習が始まった。まずは、クラス対抗の応援

合戦の練習だ。ぼくたちは五年二組だから、六年二組の

応援団のわき役だ。それなのに、ゆりちゃんは五年生で、

一人だけわき役にならなかった。六年生の応援団に仲間

入り。だってバトンドンスができるから。

「いいなー。」と、クラスみんなは口々に言った。ゆ

りちゃんはピース、ピースとカニのように横歩きをする。

ゆりちゃんのバトンは、鉄棒が縮んだみたいなの六十セ

ンチくらいのだ。両端に白いゴムがくっついていて、

「ねえ、バトン見せて。へえ、……さわっていい?」

昼休み、ゆりちゃんの周りに女子が集まってきた。そ

の後、みんなで体育館に行って、ゆりちゃんのバトンの

腕前を見ることになった。

ゆりちゃんがバトンをぼーんと高く投げる。バトンは

くるくる回転しながら落ちてくる。それを受け止める。

また、回して投げる。うす暗い体育館に、紺色の体操服
姿のゆりちゃんの色白の肌が、際立って白く見えた。

「うまいねえ。すごいねえ。」と、みんなは言った。

ゆりちゃんはバトンを放り投げた後、上を向いてバト

ンの行方を確かめた。ゆりちゃんが上を見上げると、色

白の顔に目と目、鼻の穴。四つ、黒丸がうかんだ。その

とき事件が起こった。

「あ、鼻の穴。」

だれかが小さな声でつぶやいたんだ。いつもは見えない

い、ゆりちゃんの鼻の穴。今日はそれが目立って黒い丸

に見えた。

ただ、それだけのことだった。ところが別のだれかが

「鼻の穴、鼻の穴……。」と、くり返したとたん、笑い声

が広がった。

何がおもしろいのか分からない。ぼくは何も言えずに

うつむいた。

「あ!」

そのときバトンが思いもしない方向へ飛んでった。ゆ

りちゃんは、へへへ、と頭をかき、バトンを拾いに走った。

帰り道、雨が降ってきた。だけど、ぼくはかさを差さない。これはバトンだ。右手でくると、一回、回す。左手に持ちかえ、また回す。右手、くるり。左手、くるり。交互に持ちかえて回す。もつと速く。もつとなめらかに。だけどゆりちゃんのように、うまく回せない。

「くそっ。」

ぼくは大きく息をはいた。そのとき、後ろから走って近づく足音が聞こえた。

「ちがう、ちがう。手をね、こう使うんよ。」

ゆりちゃんだ。ゆりちゃんは大股で歩いてぼくの横に立つと自分のかさを閉じて、回してみせた。ゆつくり、ゆつくり。だんだん速く。かさは、まるで黄色いバトン。回るたびに水滴が横へびゆつ、ぴゅつと飛び散る。

ゆりちゃんは、ときどき真面目な顔をして、こんなふうに一生けん命になる。かけっこもドッジボールも、それからバトンも。ゆりちゃんが真面目な顔になると、ぼ

くは、ちょっと困る。おどけた顔のゆりちゃんのほうが話しやすいから。

ぼくは、ゆりちゃんと並んで歩く。ゆりちゃんはだまったまんま。ぼくも話すことがうかばない。

ぼくはかさを放り投げた。かさはいろいろな方向へ飛んでいき地面に落ちる。拾って、また投げる。上へ、高く。また落ちる。

「真上に投げるんよ。」

ゆりちゃんが歩きながら空を指差した。

ぼくはだまって放り投げた。かさは、ゆりちゃんの方へ飛んだ。

「あつ。」と、ぼくが言うと、「ほい。」と、ゆりちゃんが手を出してつかんだ。

「ぼくが投げて、ぼくが受け取るから。」

ぼくはかさをもういちど上に高く放り投げた。その瞬間だ。ゆりちゃんが、上を向いたぼくの顔を指差してつぶやいた。

「ほら、鼻の穴。」

「えっ。」

ぼくはどきんとして、鼻を手でかくした。ばさつ、とかがさが地面に落ちた。ゆりちゃん、あのとき聞こえていたんだ。

「見えたらいかんのよね。」と、ゆりちゃんは言いながらぼくのかさを拾った。

「な、何が。」

「こう、バトンを上にとげると、顔を上げてバトンを見なくなるんだけどね。顔はまっすぐにしておくの。だから鼻の穴は見えちゃ、いけないの。」

「へ、へえ。」

ぼくは、うつむいてかさを受け取った。やつぱり、聞こえていたんだ。何て言おうか。白い顔に黒丸四つなんて、レーズンパンっぽくていいじゃないか……とは、言っではいけない気がする。

「き、気にすることないよ。」

ぼくにしては、精いっぱい言葉だったと思う。それなのにゆりちゃんは、怒ったような顔をして「別に、鼻

の穴は気にしてない。」と言った。

「じゃ、何で鼻の穴の話なんかするんだよ。」

「バトンを投げたら、上を見上げるなってこと。」

「ああ……そっか。てつきりみんなに笑われたことが気になったのかと思った。」

ぼくは口に出した後、しまった、と思った。だってゆりちゃんの顔がぐにやりと、ゆがんだんだ。やばい、泣きだしそうな雰囲気だ。ぼくが固まっていると、ゆりちゃんは顔をゆがめたままつぶやいた。

「……ずるいって、思われている気がする。」

「へ？ 何で、ゆりちゃんがずるいんだ？」

「だって、六年生といっしょに……しているから。」

それを聞いた瞬間、のどのおくがきゅうって痛くなつた。どうして痛くなつたのかは、分からない。

「そ、それは、バトンがうまいからだろう。」

その言葉は、ぼくの口から出た言葉なのに、まるで別の人と言ったみたいによくの耳にひびいた。

ぼくが口ごもると、ゆりちゃんはふざけた。

「そう。私はバトンがうまい！」

そう言ったゆりちゃんの声は、もういつものおどけた声にもどっていた。ほっとして、ぼくもふざける。

「ぼくのな、鼻って、変な音鳴るんだ。ほら。」

鼻を上に向け、大きくふくらませると、ゆりちゃんに向かつてブーッと息をはいた。

「きつたないなあ。」

ゆりちゃんは、けたけた笑って走りだした。

次の日の三時間目。また応援合戦の練習だ。ぼくたちは一列に並んで体育座りをした。

たいこが鳴った。音楽に合わせてダンスが始まった。ゆりちゃんが音楽に合わせてバトンをくるくる回し始めた。バトンを高く投げ、側転を一回してバトンを受け取る。それをくり返していたときだ。音楽とゆりちゃんの動きがずれてきた。

ゆりちゃんは、音楽に合わせるためにバトンをさらに高く投げて、回転するバトンを心配そうに見上げた。

あ、鼻の穴が見える。ぼくがそう思った瞬間、となり

に座っていた女子がくすりと笑った。だめだ。くすくすは、伝染する。ぼくはとつさに声を上げた。

「上向くな、ゆりちゃん。鼻の穴、見えるぞ。」

思ったより大きな声になった。

びつくりした顔でとなりの女子がふり返った。みんながぼくの方をちらっと見た。

みんな、何でそんなにびつくりするんだろう。ぼくは、つばをぐくんと飲みこんだ。ああ、これは、あのときと似ている。

給食の時間、「余ったレーズンパン、いる人。」って声をかけられたとき、周りの人はだれも手を挙げない。ぼくは挙げそうになった手を下ろしかけて……、やつぱり挙げる。すると、みんながちよっと笑いを含んだ驚いた顔で、ぼくを見るんだ。

ゆりちゃんは離れた所から、ぼくを見た。そして、ぼくに向かって右腕をのばすと親指をぴんと立てた。いつものおどけた顔じゃない。真面目な顔をして。

ゆりちゃんは、バトンを回しだす。リズムカルに高く

放り投げ、側転を一回。さらに高く放り投げ、側転を二回。そして走り、ぴたっと足を止めると、背筋をぴんとのばす。あごを下げ、前を向いて落ちてくるバトンを静かに受け取った。まるでそこにバトンが落ちてくるのが、

初めから分かっていたように。

「おおー、かっこいい。」

だれかのそんな声が聞こえた。

すると、ゆりちゃんは、腰に手を当てると、おどけた顔で、鼻を上に向けフンツと鳴らした。みんな、ゆりちゃんを見て笑ってる。

やったな、ゆりちゃん。ぼくは体育座りのひざの下で親指をそつと立てた。

ふと、窓の外に目を向けると、いつのまにか雨はやみ透き通るような青空が広がっていた。

捨てられた菓子パンの袋がつむじ風に乗ってくるくる舞っていたこと。プールの授業で使ったビート板に誰かの菌形があったこと。自動販売機の光に吸い寄せられた一匹の虫のこと。亡くなってしまった飼い犬の首輪をこっそりと嗅いでみたこと。友達や先生や親に話すほどでもないけれど、だからこそ自分の心に残っている小さな風景や感情。僕はそういうものを思い出しながら短歌にするのが好きで、例えば、

つむじ風、ここにあります 菓子パンの袋がそつと教えてくれる

永遠に補修をされることがないビート板には誰かの菌形

自販機のひかりまみれのカゲロウが喉の渴きを癒せずにいる

生きていたころの夏毛が絡まったままの首輪をおもいきり嗅ぐ

こんなふうな五・七・五・七・七にしています。短歌というのは五・七・五・七・七のリズムで読める短い詩だと僕は思っています。ルールは五・七・五・七・七であること。たったこれだけです。「保健室」(ほ・け・ん・し・つ)は五。「小学校」(しょう・う・が・つ・こう)は六。「ファミリーマート」(ふあ・み・り・

い・ま・あ・と)は七、というふうに文字ではなく音で数えます。声に出して指を折りながら数えると分かりやすいかもしれません。「先生」(せ・ん・せ・い)は四ですが、「先生の」とか「先生が」にすると五になります。

僕はふだん五・七・五・七・七で何かを考えたり、しゃべったりしているわけではありません。この文章を読んでくれているあなたもきっとそうでしょう。ではなぜ、わざわざ五・七・五・七・七にしようとするのでしょうか。僕は二つの理由があるように思います。一つは捕まえるためです。あなたも僕も毎日生きていて、生きていればたくさんの物事が僕たちを通り過ぎていきます。その物事の中には、確かに自分の心を揺らしたのに、数年後には覚えていないこともあるでしょう。心の揺れが小さければ小さいほど消えてしまいうすいと思います。せつかく揺れたのにもったいないですよ。そんなとき、ふだんとは違う五・七・五・七・七の網を持っていけば、そういう揺れを捕まえることができるのです。思い出を振り返って、その網で捕まえに行くこともできます。大人になったら、菓子パンの袋に、ビート板の菌形に心は揺れないかもしれない。今のあなただからこそ揺れた。そんな物事を捕まえることができるように思います。そして、短歌にしておけば、あなたが忘れても、その短歌が覚えていてくれます。

もう一つの理由はやさしくあり続けるためです。もしもあなたが短歌を作るなら、頭や心の中にある風景や感情を五・七・五・七・七に収めるために、言葉を選んでみたり、書く順番を入れ替えてみたり、ここは書いて、ここは書かなくてもいいかな、と考えてみたりするでしょう。普通にしゃべるよりも時間がかかると思います。でもそれはそのまま自分に向き合う時間でもあるのです。授業も部活も宿題もたいへんで、楽しみな遊びの約束やテレビ番組や動画も待っている。あなたの周りに、あなたの外側にい



そんなものがあふれている。そんな中で、短歌を作ることを通して自分の内側を見つめてみる時間は、自分を大切にすることにもつながります。そして、自分を大切にできれば、友達や先生や親にもやさしくなれる。きっとあなたはやさしいでしょうけれど、自分の言葉や心の揺れに向き合うことで、これからも自分や他人にやさしいあなたでいられるはずです。

読み終えてややふつくらとした本にあなたの日々が挟はさまれている

これから何十年と続くあなたの人生に、短歌というしおりを挟んでくれたら歌人として僕はうれしいです。短歌の未来にいるのは、僕ではなく、間違いなくあなたですから。美しいこと、かつこいこと、友達や先生や親にほめられそうなことばかり書かなくても大丈夫。難しい言葉や学校で習った短歌っぽい言葉を使わなくてもいい。今のあなたの心にある小さな揺れを、今のあなたの言葉で捕まえてみてください。もしそれが短歌になったら、ぜひ僕に読ませてください。いつまでも楽しみにお待ちしております。

木下龍也 歌人。歌集に「あなたのための短歌集」「オールアラウンドユー」などがある。

イラスト・落合晴香



科学エッセー

進化の話

内藤 健ないとうけん

この世界は奇跡きせきでできている。別に神様しんぎょうや宗教しゅうきょうの話ではない。進化の話だ。

キリンの首はなぜ長いのか。多くの人は、高い木の葉っぱを食べるためだと言う。まるで、高い木の葉っぱを食べるという目的のために、キリンが自ら進化したかのように。だが、ここで少し立ち止まって考えてみよう。キリンの祖先は、首の短い動物だった。その祖先動物が「あの木の葉っぱを食べてみたい。いつか絶対食べてやるんだ。」と精いっぱい首を伸ばす努力を重ねたから、キリンの首は長くなったのだろうか。祖先動物のお母さんが「私の子どもにはあの葉っぱを食べさせてやりたい。」と願いながら生んだから、キリンの首は長くなったのだろうか。もう分かっただろう。そんなことあるわけではないのである。

親より首が長い子どもが偶然生まれたりするのは、別にキリンの祖先に限った話ではない。人間を含め、どんな動物にだって起きることがある。でもたいていの場合は下手に首が長くなっても地面の草を食べたり水を飲んだりするのに不便だし、バランスも悪くなつて素速く動けなくなる。つまり餌や水を得るうえでも、敵から逃げるうえでもほかの仲間より不利になり、生き残つて子孫を残す可能性は低くなる。キリンのほかに首の長い動物がほとんどいないのはそういうわけだ。

ただ、それなりにたくさんの木が生えていて、しかもその木の葉っぱを食べる動物があまりいない

サバンナのような場所で、首の長い動物が生まれたら？ そうなったらもう食べ放題である。別に努力の結果でも何でもない。ただこの世に長い首を持つて生まれ落ち、立ち上がって見たら、目の前に餌となる葉っぱがいっぱいに広がっている。じゃあそれ食べよう。ほかのみんなは地面の草を奪い合ってるみたいだけど。ねえ、どうしてみんなは木の葉っぱを食べないの？ え、届かない？ へえ、たいへんだね。——といったところだ。

もちろん、一夜にして高さ六メートルにも達するキリンが生まれてきたわけではない。初期のキリンは比較的低い枝に届くくらいの高さしかなかっただろう。だが、それでも餌には困らないし、生き延びて子孫を残す可能性は高くなる。そして背の高い個体からは背の高い子どもが生まれやすいため、背の高い個体が増えていく。数が増えれば、そのうち低い枝の葉っぱは食べ尽くされてしまう。そうになると、今度はキリンどうしでの競争が始まる。競争といっても、努力したものが勝つ、という競争ではない。同じ親から生まれた人の子でも身長に違いが出てくるように、キリンの兄弟にもほかより背の高いものや低いものが生まれてくる。他の仲間が届かない高さに届くものは、より高い枝の葉を食べられるため生き残りやすく、子孫も残しやすい。そうやって世代を重ねるごとに、より首の長いものが選抜されていく。キリンはこうして進化したのだ。

改めて念を押しておくが、環境に適した子どもが突然生まれることは狙って起こせるようなものではない。ただでさえめつたに起きないようなことが、よりによってそれがマツチするような場所で起きるという奇跡のような出来事の繰り返し。それが生き物の進化というものである。あなたの手がものをつかめるといったたつたそれだけのことも、進化という視点で考えてみれば驚くべきことなのだ（シーラカンスのひれからヒトの手が進化するのに必要な変化の過程を想像してみてほしい）。それどころか、理科の授業に出てくる動物や昆虫や植物のあらゆる特徴が、全て進化によって生まれた

ものののだ。虫を呼ぶ植物の花も、空を飛ぶ鳥の翼も、獲物を切り裂くライオンの牙も、敵を投げ飛ばすカブトムシの角も。そろそろ最初の言葉の意味が分かってもらえただろうか。この世界は奇跡でできているのである。

さて、私はアズキの研究をしながら生きている。それは生き物の進化の中でもアズキの進化に心を奪われたからだ。アズキの仲間には、厳しい環境の中で生き延びているものがたくさんある。水が少ない砂漠。海水をかぶる砂浜。土がほとんどない岩山。水浸しの湿地。どれも、多くの植物にとって生きていくのが困難な過酷な環境だが、それぞれの環境に適した特殊能力を持つアズキが進化して、繁栄しているのである。他の人と同じことをしたくないという私の心に、このアズキの特徴がぶつ刺さってしまったのだ。

しかも、アズキの特徴は役に立つ。他の植物が生きていけない環境で生きられるということは、その特徴を生かした作物を作れば、今農業ができない土地でも育ってくれるかもしれないのである。暑さによって作物がやられてしまうという最近増えてきた問題も、暑さに強いアズキが解決してくれるかもしれない。アズキに起きた進化という奇跡が、巡り巡って人類にとっての奇跡を起こす。そんな日を夢に見つつ、日々を研究に費やしている。

学校あるある



学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

伊藤ハムスター

みんなの「あるある」大募集!

みなさんの学校の「あるある」を教えてください！
投稿はこちらから



体育の金棒の授業の後、手のひらがめっちゃ金くさい。しかもなかなか取れない。



昼休みの放送で好きな曲がかかるとテンションが上がる。



やさしい先生ほどおこるとこわい。



●「それってあなたの感想ですね」さん(小学生)からの投稿をもとに作成。ありがとうございました!

伊藤ハムスター イラストレーター。多摩美術大学油絵科卒業。「こども六法」などのイラストを担当。著書に「ぼくのへや」がある。

しおりライブラリー

VOL. 02

読んでいた本からはなれるときにページにはさむ、しおり。
「青いスピンの」の「スピン」もまた、本に付いているしおりのこと。
今回は、読者のみなさんのエピソードやアイデアをしょうかいします。

あなたのお気に入りのしおりや、本にはさんでいるものを教えてください。



応募フォームはこちら



しおり04 しおりは自作しています。デザインがしやれた土産物の包み紙や、友禅和紙をはり合わせるだけで簡単に作れます。ときには本の中の気に入ったフレーズを書きこんで楽しんでいきます。世界に一つだけの自作のしおりで読書の楽しさが倍になります。
(元教員・コスモス24)

しおり05 夏に旅行したイタリアで革製のしおりを購入しました。



長毛の茶色いねこがルネサンス風の画家によってかかれています。ねこの表情がおとし旅立った飼いねこにそっくりで、迷いなく一番に手に取り日本に連れて帰ってきました。革製のしおりを持つのは初めてです。その柔らかい手ざわりと緻密な絵からは、本を読み進める私にさまざまな思い出を作ってくれています。私を見つめるまつすぐなこの眼差しに包まれながら読書を楽しんでいます。
(リエまま)



しおり06 定規をはさんでいます。本を読むとき勉強机で読んでいるのでしおりが欲しいとき一番に目に入るのが定規です。(小学生・なつぽし)

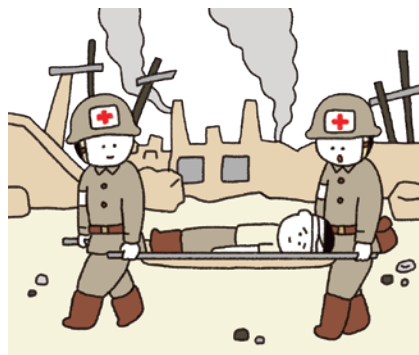
1 ルールを守ってもらうためには 多くの人に知ってもらうことが大切



私たちにできることは、まず「ルールがある」ことを知ることです。一人一人がルールを学び、大切だと感じたら、周りの人と話してみてください。みんなが「大切だ。」と思っていくことで、ルールを守らない人にも「それはちがう。」と気づいてもらう力になります。例えば、国際人道法や核兵器禁止条約といったルールを知り、支持していくことで、世界を少しずつ変えていきます。

- ・負傷者や病人は敵味方問わず保護する。
- ・市民や子どもを攻撃してはいけません。
- ・医療施設や赤十字のマークを付けたものは攻撃しない。
- ・公正な裁判を受ける権利が保障され、拷問は禁止される。
- ・ダメージを無差別にあたえる兵器は使用しない。

核兵器について考えよう
二〇二五年は第二次世界大戦終結から八十年の節目にあたります。日本でも、沖縄戦や東京大空襲、原子爆弾投下など、戦争で、多くの市民がげせいとなりました。SDGsを作った国際連合(国連)は、第二次世界大戦を防げなかった反省から、国際の平和と安全を目的



こういったルールをもとに、紛争地で命を守る活動が行われているのです。ですが、このルールを無視して、攻撃を行う人も少なくないのが現実です。みんながルールを守るようにするためには、どうしたらよいでしょうか。みなさんも考えてみませんか。

無差別大量破壊兵器である「核兵器」についてです。核兵器については、持っている国に対して、戦争をしかけにくくなるという点から、これを戦争の「抑止力」と呼び、有効だという声や、究極の自衛手段だと語る声もあります。しかし、核兵器を使用した際には取り返しのつかない大きな被害が発生し、政府や団体ががんばっても、救援が追いつかないという現実があります。また、実際には核兵器を保有している国が自ら戦争を始めることや、核兵器をねらった攻撃が起る可能性や誤作動で核兵器を使用してしまうといったリスクもあります。みなさんは核兵器についてどのように考えますか？

SDGsの実現に貢献する団体

赤十字

赤十字の始まりは、19世紀に出張中だったスイス人のビジネスマン、アンリー・デュナンが戦場を見て、「敵味方関係なく、苦しむ人は救うべきだ。」とうったえたことでした。そこから共感の輪が広がり、赤十字という人道支援のネットワークが生まれました。赤十字は、核兵器の脅威やリスクのない世界を実現するために、これからも各国と協力して取り組みを続けていきます。赤十字はSDGsを直接の目標にしているわけではありませんが、「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」といったSDGsの目標に大きく貢献する活動をしています。



今回しようかいした国際人道法に関するものはじめ、さまざまな資料を用意しています。



世界では、4分間に1人、暴力によって子どもが亡くなっています。

出典:公益財団法人 日本ユニセフ協会ホームページ

目で読むSDGs図鑑

平和のために、
できることは何か
考えてみよう！

みなさんは、SDGs17の目標のうちの二つ、「平和と公正をすべての人に」を知っていますか？「平和と公正」について考えたことはありますか？平和とはどのようなことを指すのでしょうか。今回は、日本赤十字社の篠崎さんにお話をうかがいました。

日本赤十字社



篠崎 翔太

今回の記事は日本赤十字社の篠崎さんに「平和と公正」についてお話をうかがいました。

戦争・暴力にさらされる子どもたち

「平和と公正をすべての人に」のターゲットの一つに「あらゆる場所で、あらゆる形の暴力と、暴力による死を大きく減らす」というものがあります。戦争による暴力を受ける子どもは、今も世界中に大勢いるのです。

戦争がなければ平和？

戦争がなければ、戦争が終われば、平和といえるでしょうか。戦争がないだけでは、平和は実現したとはいえません。世界で人々の命を守るために動いている団体の一つ、赤十字では「平和」とは次のようなことだと考えています。

赤十字が考える「平和」は、単に「戦争がない状態」だけではありません。人々が自由に生き、自らの意思で行動でき、おたがいを尊重し、支え合いながらともに暮

戦争が起こったとき、 人道を実現するために

戦争や災害が、もしも起こってしまった場合、どうするのでしょうか。例えば、赤十字は、ウクライナやガザをはじめ、世界の紛争地や被災地で命を守る活動を行っています。たとえ戦争中であっても、最低限人々の命と尊厳が守られるように、定められているルールがあります。「国際人道法」といいます。具体的には次のようなものです。

「平和と公正をすべての人に」を目指すためには、私たち一人一人が「何がみんなにとって正しいのか」を主眼的に考え、対話や協力を重ね、社会をよりよくする努力を続ける必要があります。戦争を経験してつらい思いをした人は、「平和は待っていても自動的に来るものではない。みんなが努力して築くものだ。」と語っています。



プロフィール

名前
カーレン・アーノルド・マソンダ
(姉・12歳)

好きなこと・もの
学ぶこと

好きな教科
算数

習い事
ピアノ、アイスホッケー、体操

好きな食べ物
お米とお魚

好きなスポーツ
ネットボール(バスケットボールに似たスポーツ)

行ってみたい国
ナイジェリア

日本について知っていること
車を作っている

将来の夢
医師



プロフィール

名前
アナベル・アーノルド・マソンダ
(妹・7歳)

好きなこと・もの
本(物語)を読むこと

好きな教科
英語

好きな食べ物
お米とお肉

好きなスポーツ
テコンドー

行ってみたい国
メキシコ

日本について知っていること
技術の発達した国

将来の夢
学校の先生

カーレンさん& アナベルさん姉妹の1日

午前5:30 起床

起きたら、着替えて、朝ご飯を食べます。卵料理と牛乳の組み合わせが多いです。

午前6:40 出発

スクールバスに乗って登校します。

午前8:30 授業

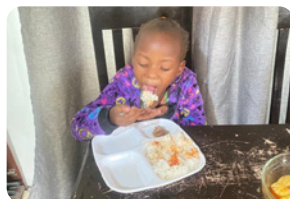
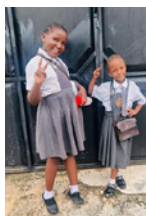
午後0:00ごろ 給食
お米と豆のメニューです。

午後4:00 帰宅

シャワーを浴びて宿題をやったり、両親の手伝いをしたりします。

午後6:30 夕食

この日のメニューは肉とじゃがいもの煮込みです。



午後8:30 就寝

スワヒリ語の「こんにちは」
Habari(ハバリ)!

スワヒリ語の「ありがとう」
Asante(アサンテ)!

インド洋に面したダルエスサラームは、タンザニアの旧首都だよ。実は1973年に、「広い国土を治めるのに都合がいい」という理由で、内陸部のドドマに首都が移されたんだ。でも、いまだ政府官庁や中央銀行などの国家機関は、ダルエスサラームにある。人口もドドマよりも圧倒的に多く、ダルエスサラームはタンザニア最大の都市として発展を続けているよ。街には高層ビルやマンション、大型ショッピングモールもあり、活気にあふれている。美しい砂浜が続く「ココビーチ」や街一番のにぎわいの「カリアカー市場」は、観光客にも人気だよ。



タンザニア

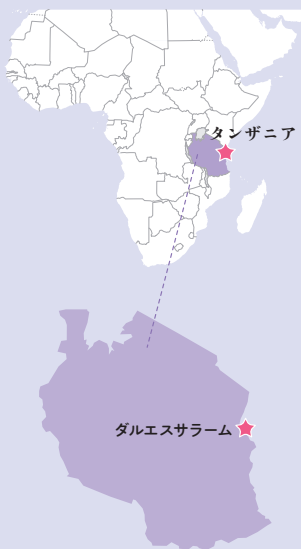
ダルエスサラームって、どんな街?

面積 およそ1,393km²
人口 およそ514万7,000人
宗教 キリスト教(約40%)、イスラム教(約40%)、土着宗教(約20%)
※タンザニア全体
言語 スワヒリ語(国語)、英語(公用語)

タンザニアの「事実上の首都」。経済成長にともない急速に人口が増加していて、2050年には1,000万人を突破するとされているよ。



ダルエスサラームのビル街。ジュリアス・ニエレレ国際空港やフェリー乗り場もあるよ。



姉のカーレンさん(左)と妹のアナベルさん(右)。家族でジュリアス・ニエレレ国際空港に行ったときの写真。

タンザニアは、東アフリカで最大の国土をほこる国だよ。日本の約2.5倍もあるんだ。北部にはアフリカ大陸で最も高い山「キリマンジャロ」(標高5895m)がそびえる。その付近で栽培されるコーヒー豆は世界的に有名だよ。また、山の裾野には世界遺産の「セレンゲティ国立公園」が広がっているよ。広大なサバンナには、ゾウやライオンなどアフリカを代表する野生動物が約300万頭も生息しているんだ。

そんなタンザニアの最大都市「ダルエスサラーム」でマソンダさん姉妹は暮らしている。妹のアナベルさんは、小学1年生。タンザニアでは、7歳から14歳までの7年間で義務教育期間で小学校に通うんだ。中学(2年間)に進学できる子どもは、半分ほど※。しかも、家庭の事情などで中途退学する子も多く、卒業できるのは3割程度になっってしまうよ。さらに高校(4年間)を卒業できる子どもは、1割以下。10人に1人にも満たない。日本とは大きく事情が異なるね。

「私はたくさん勉強して、将来は先生になりたい。子どもたちにも、いろんなことを教えてあげたい。」

一方、姉のカーレンさんは小学5年生。夢は医師になること。「病気で苦しむ人の助けになりたい。みんなが健康で暮らせる世の中にできたらいいと思います。」

二人は、とても仲良し。いつもいっしょに遊んでいるよ。登校もいっしょで、毎朝5時半ごろに起きて、スクールバスに乗るんだ。ダルエスサラームは急速に街が発展していて、人口が急増中。街が活気にあふれる一方で、深刻な交通渋滞が問題になっているよ。二人が乗るバスも、にぎやかな朝の街をゆっくり走っているのかな?

世界の友だちの1日

タンザニア
ダルエス
サラーム

毎朝いっしょにスクールバスで登校
先生になりたい妹と、医師を目指す姉の仲良し姉妹

世界の友だちは、いったいどんな1日を過ごしているのだろう。放課後は日が暮れるまで外で遊んでいる? 今回はタンザニアのダルエスサラームに住む7歳のアナベルさんと12歳のカーレンさん姉妹にお話を聞いてみました。

WEB 青いスピン ご覧ください!

いつでも どこでも 読める

「青いスピン」に掲載している読み物は、全て「WEB 青いスピン」からも読むことができます。好きなときに好きな場所で読んでみてください。

お気に入りを 見つけよう

「WEB 青いスピン」では、過去の号に掲載している読み物も読むことができます。ぜひ、お気に入りの読み物を見つけてみてください。

「WEB 青いスピン」 にしかないコンテンツも

公募で佳作を受賞した作品など、「WEB 青いスピン」でしか読めない読み物もあります。ぜひチェックしてみてください。



WEB 青いスピン



(URL: <https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp>)
※インターネットの
通信費がかかります。

読者 アンケート



第7号の「青いスピン」でおもしろかった作品や、これから取り上げてほしいことを教えてください。

青いスピン 第7号
(2025年 秋)
2025年9月1日発行

発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リープテック
本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445 (営業総機本部) Fax:03-5390-6012
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
名古屋 052-950-2260 関西・四国 06-6397-1350
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>

表紙絵 大宮お
アートディレクション 山田和寛(nipponia)
デザイン 山田和寛+竹尾天輝子(nipponia)

